

秋碑

あきのいふみ

大槻玄澤自筆

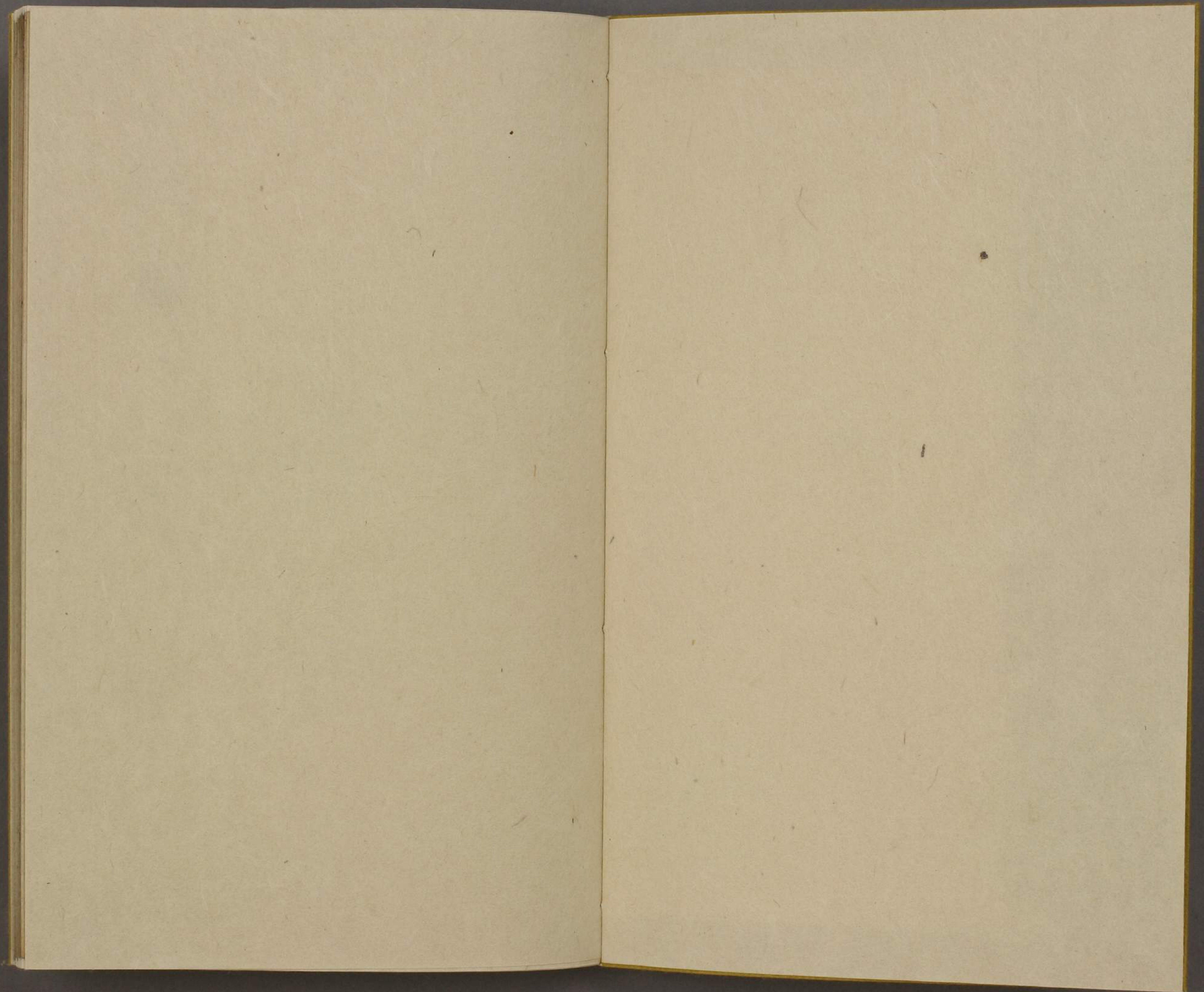
重文

洋学文庫

文庫8

A 268





秋

碑

あきたのいし



虛白軒先生

茂齋 玄梁 六十三歲

天明四年甲辰七月三日没

虛白軒無有玄極居士

十三日忘迹夜

寬政八年丙辰七月二日

秋碑

嘯風(松本先生)

空花火姊

松本先生 二番日東平田所

寬政七年乙卯五月六日没

二十九歲

菱屋空華火姊

小祥忌(二月三日)寬政八年

瓢々亭嘯風

種
碑

大觀文庫

向しく大和しく他語のあゝざんと
送りたふまきうあつたよあつたの
とらぬく一帖とがしと秋碑と題し
やうきくさる重畳は倚くまきとん

み月おらの葉草のうしろな

香風
百解

あやめんはふあもけうそそ思し
月そむししの秋れ夜のうり

定恒

いしせんもろねくましあもけと
あやめくあやめ神のおもひ

う樹

十とちのうらふとせの秋のあふ
あふのめたもせんあやめ

貞尼

とせむしあふらむせれおくら
らゆらあふらむせれおくら
めくらあふらむせれおくら
あふらむせれおくら
いさうしうらあふらむせれおくら
えぬせの秋をあふらむせれおくら
こ代女

とせむしあふらむせれおくら
らゆらあふらむせれおくら
めくらあふらむせれおくら
あふらむせれおくら
いさうしうらあふらむせれおくら
えぬせの秋をあふらむせれおくら
こ代女

先夫人を世方の心に句を記述
古の陰翳へ輝く如く

播磨とて玉櫛の日向の 巨山

白くのおもひ 武陵 蓬壺

夫人の遠志 江都 句を重なる意

又一人の 柳と賦 句を重なる意

柳と賦 句に

何となくそ秋無一昔人 春里

西へ入し跡もあ阿まう月三言 才女

縁香は好の坂を名や 塚の前 兔一

その昔は秋深人の 蓬壺

古の心と空を 赤の太

弟の如き其の侍いよる 巨轉

そふとわたりと身う 巨勇

小車は花子向ふやとつれ果ふ巨溪
吊のや今様とひらぬ魂なす巨山
この世乃時や十とせせむし守年

静か〜との代の柳よ公孫手

神の毛鷲毛とちかおやこの日

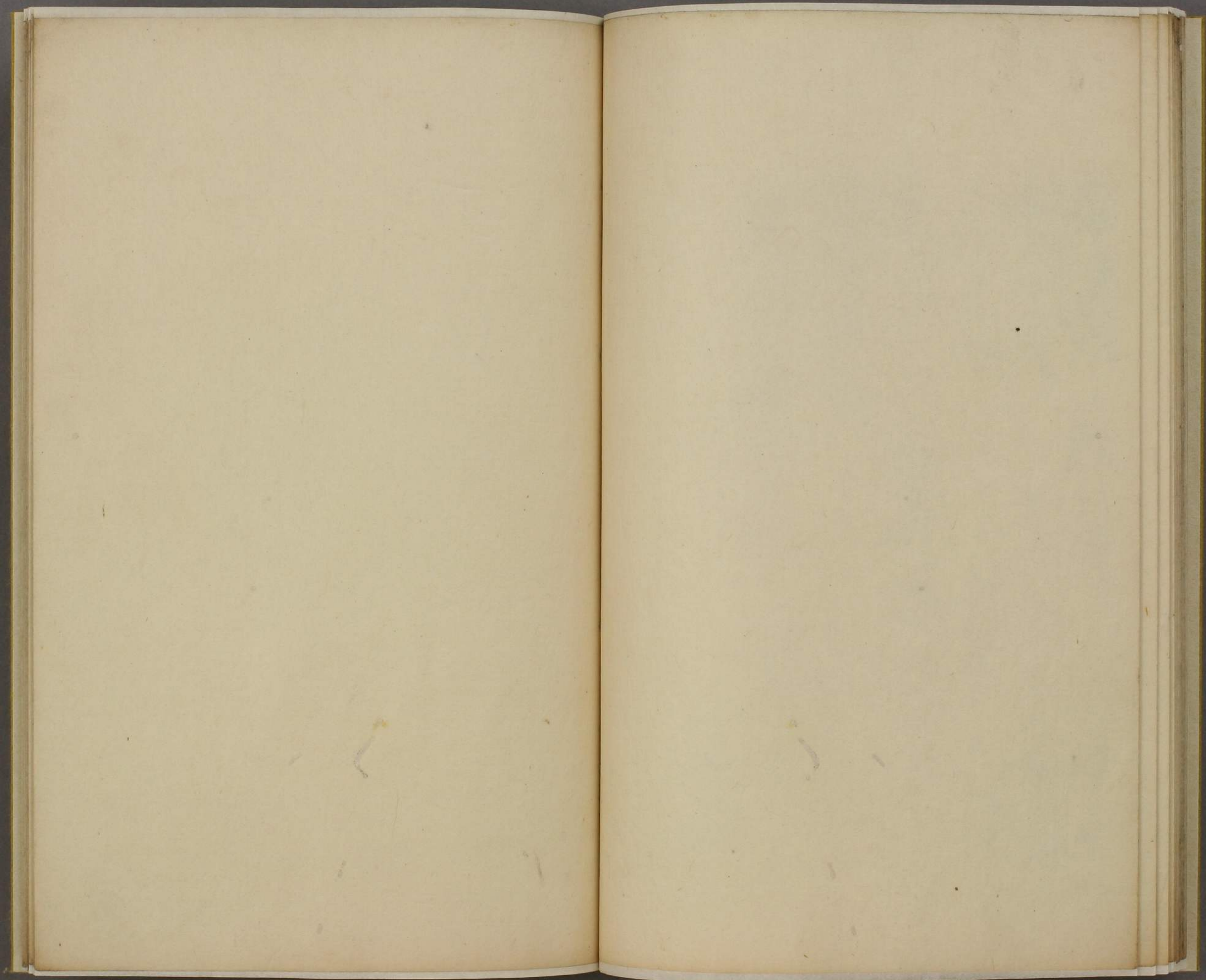
葉糸

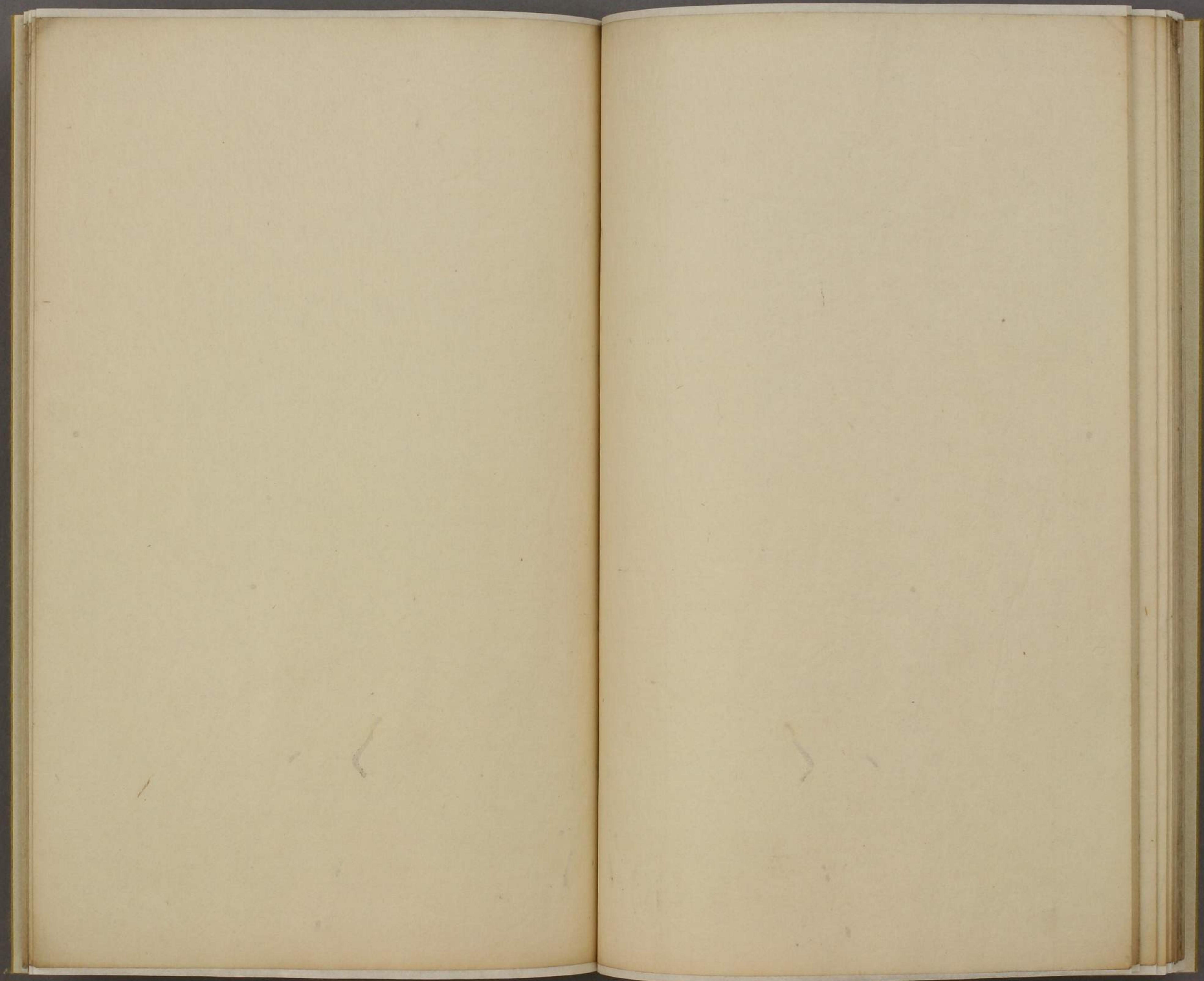
父老を新の君とて明甲辰のやし柳
秋この日みらのく一の年のてらみ
よらうせあひし〜あまのま〜まぶつ
うれ民と〜の府をらと〜一徳らの依
かたんと〜のあ〜あ〜し〜〜〜からし
家人らり吊ひをせしや又せせとをのほ
やつうれ 美の命をらと〜あ〜あ
〜もあひはあを武を物と〜し〜あ
あ〜あ〜ゆら〜あ〜く〜あ〜し〜あ

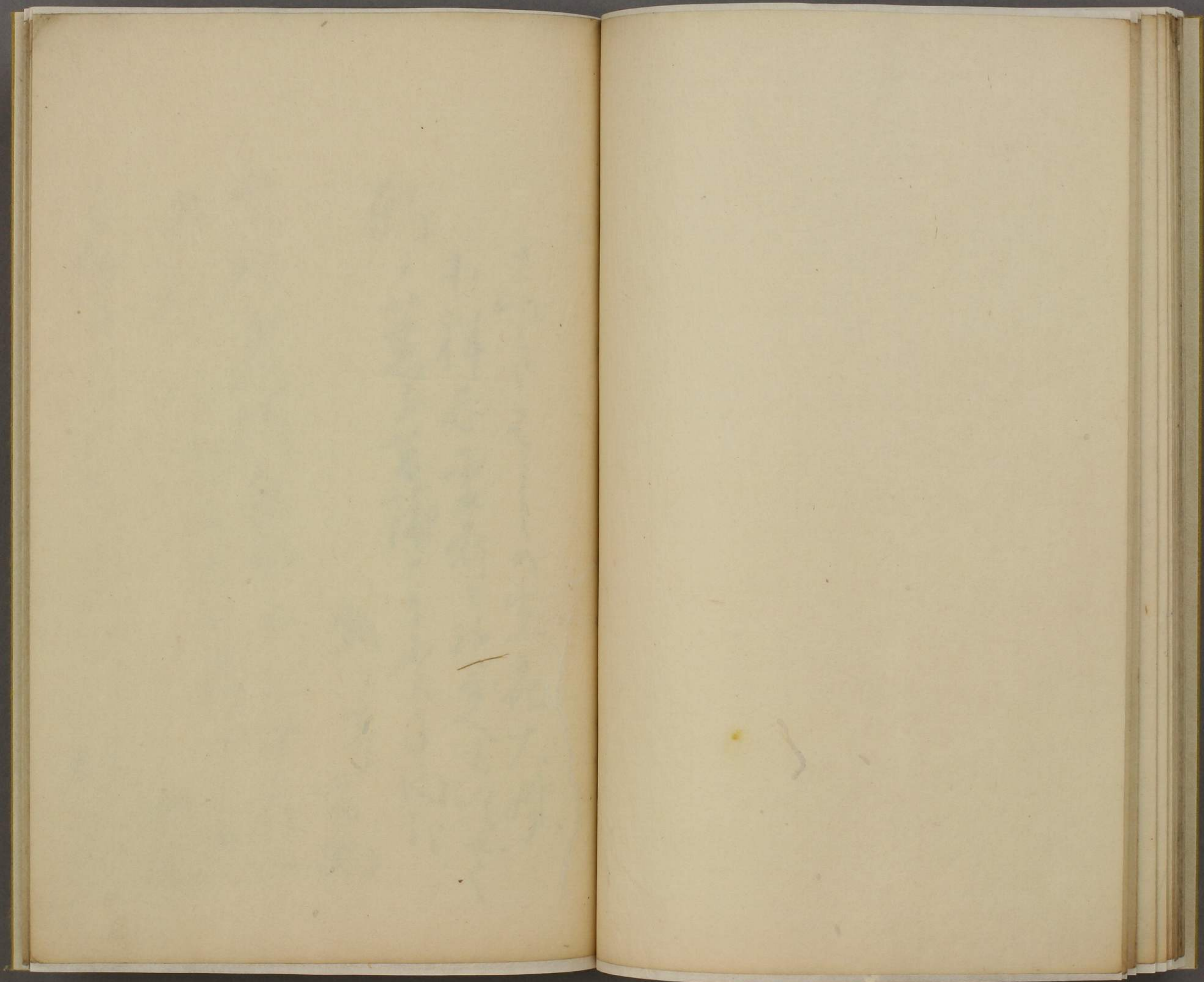
家ついでに新しゆりしと自らさる
わいしうしあまもはまのちさる
うさるもくさしとさしんはさる
うさるもくさしとさしんはさる
うさるもくさしとさしんはさる

年月の碑も五徳の白向ふ

昭和
五月
廿五日







さうさうしめの空を花大姉
お祥忌心重き前より地をくもりて
新に甘き不苦痛とてお白子向作

熱く亭風

お花正の泣きお命とみされぬ
あれこのあはれもいかに

聯句

さあさうにえぬおひとらの

いんげんをうまうまにむすぶ

了樹

きとけりし神の社をあらわし
とてかたじけなくも

てお冠

たもしいら神の社をあらわし
とてかたじけなくも

てお冠

いんげんをうまうまにむすぶ
とてかたじけなくも

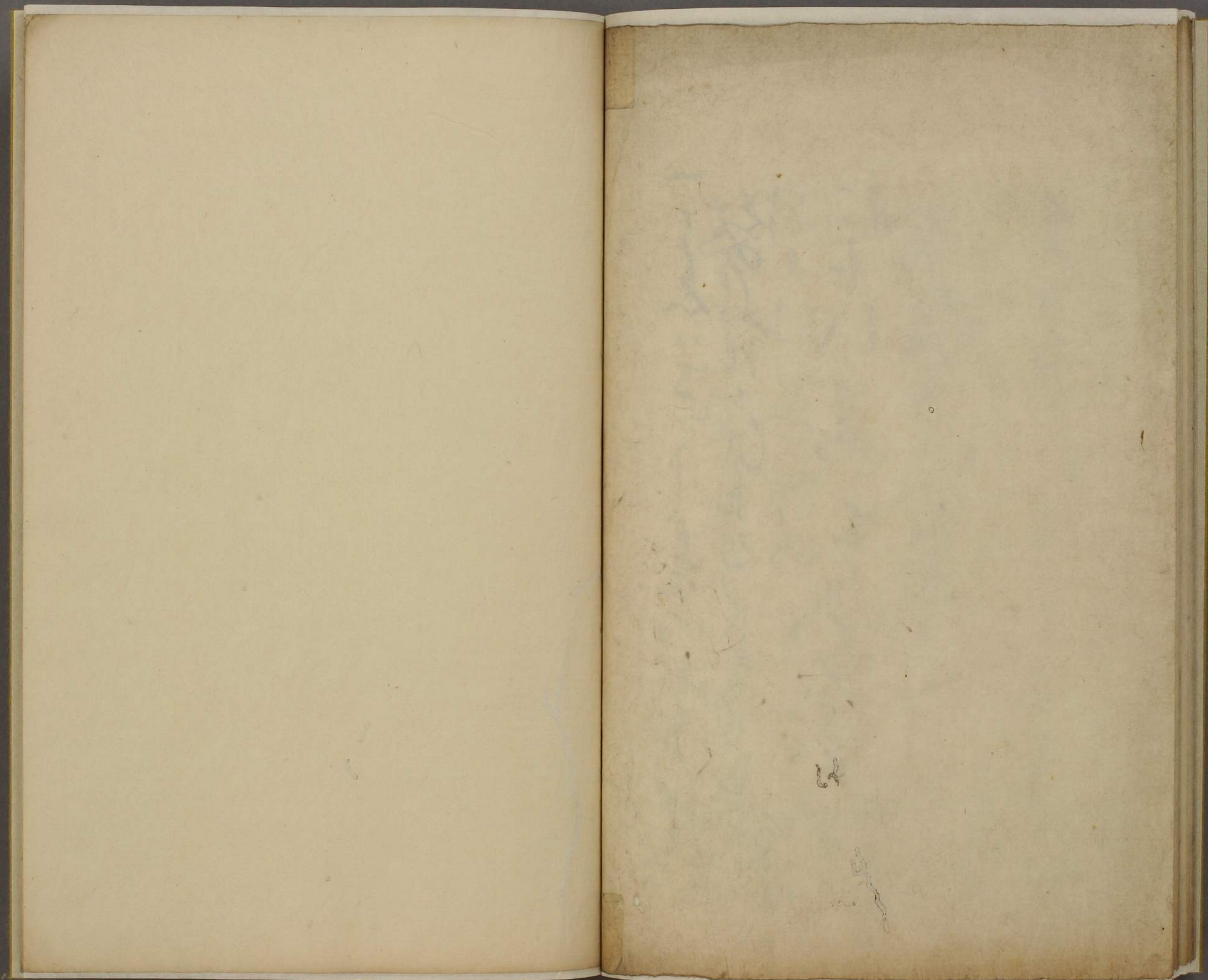
てお冠

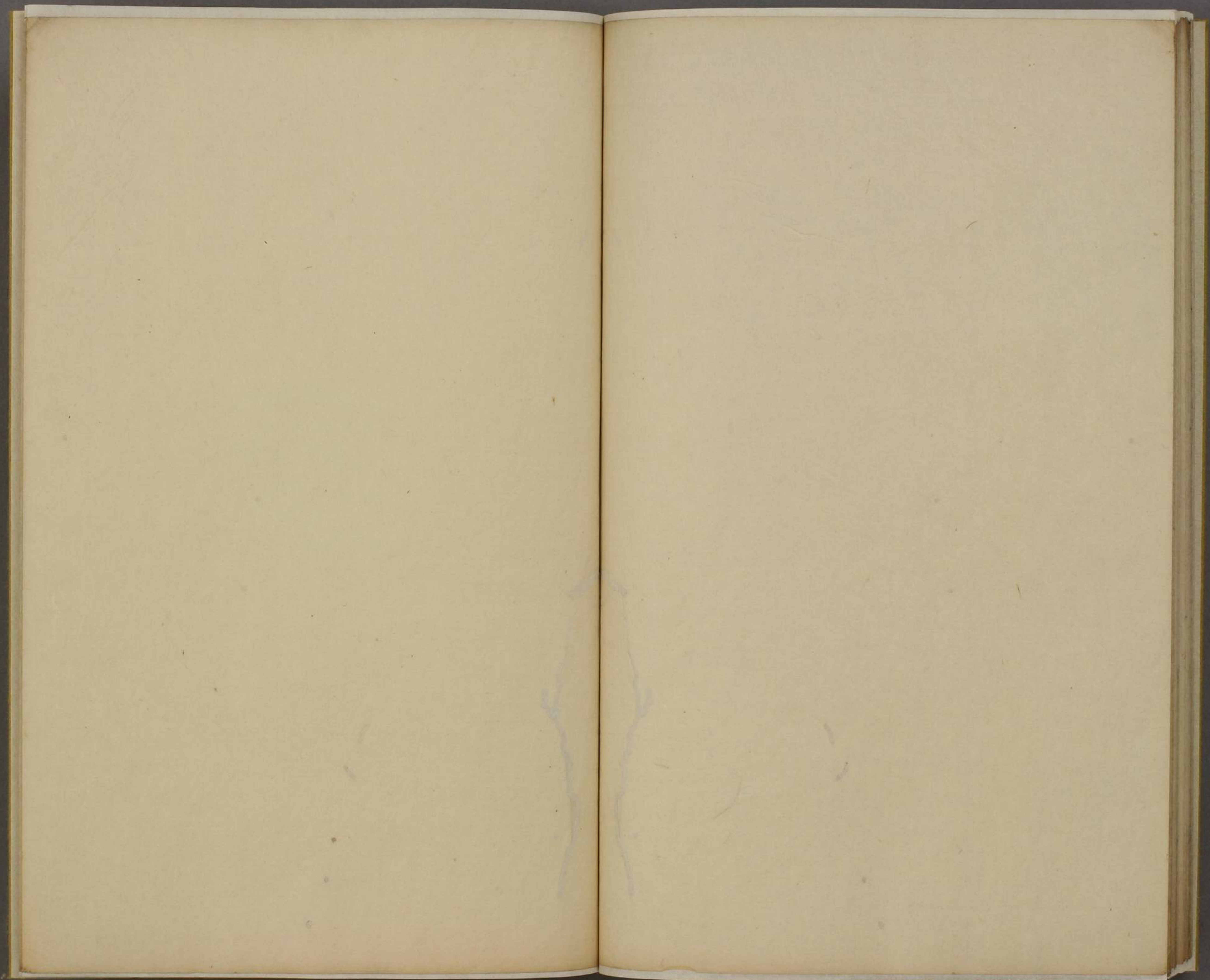
たもしいら神の社をあらわし
とてかたじけなくも

てお冠

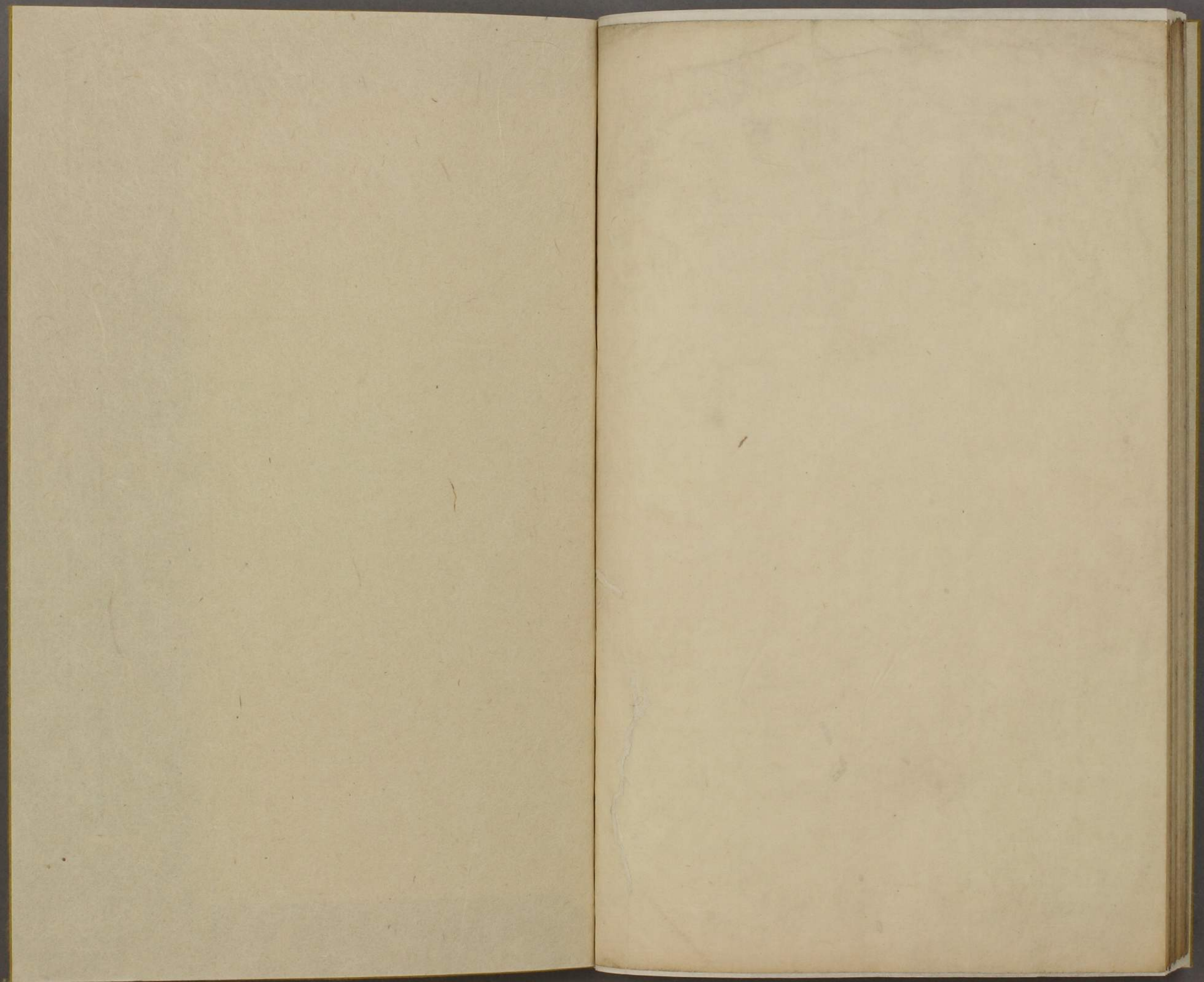
いんげんをうまうまにむすぶ
とてかたじけなくも

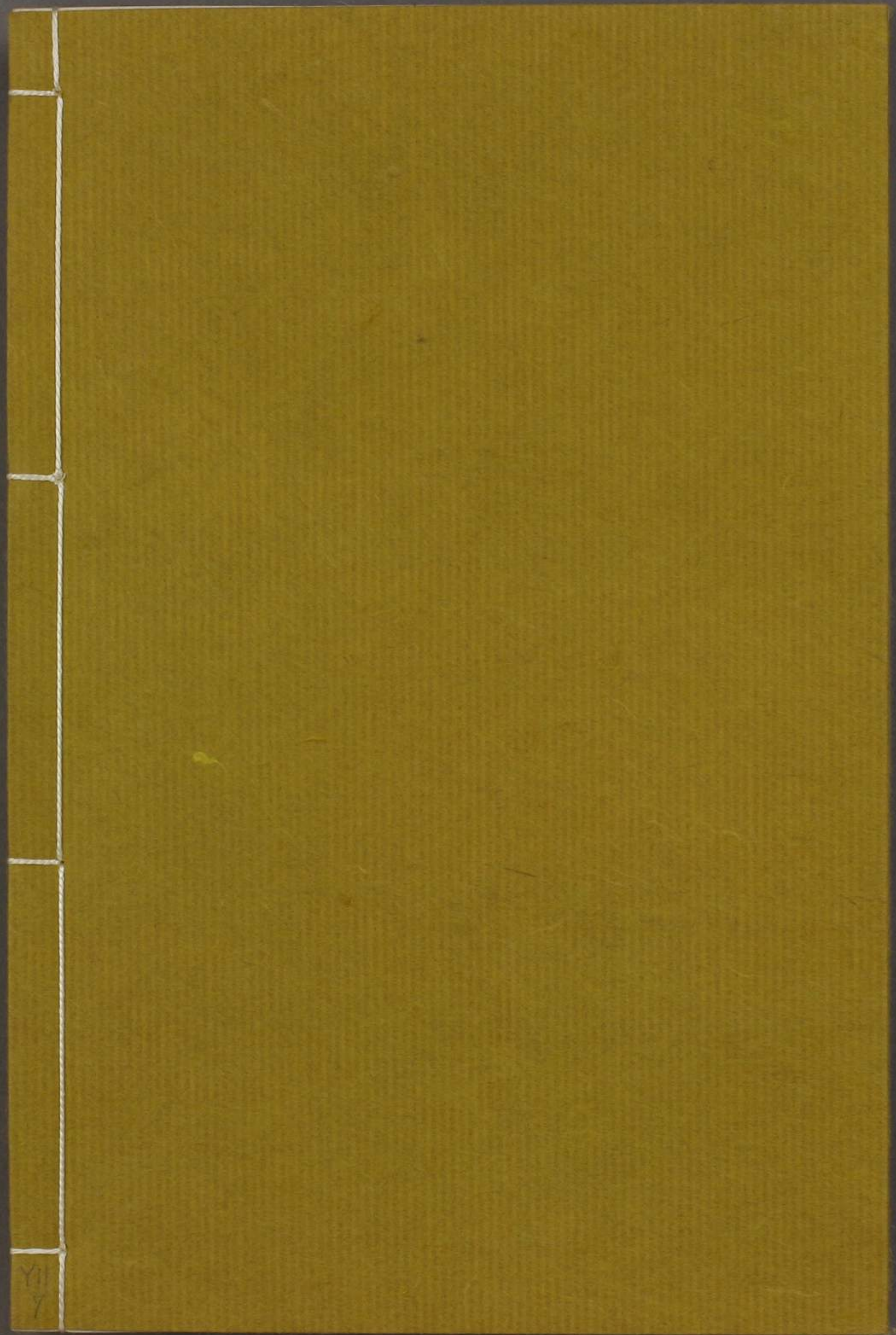
全





43-7206, 9





111
Y